

俺は今、
崖っぷちに
いる。

もちろん、
比喩的表現
って奴さ。

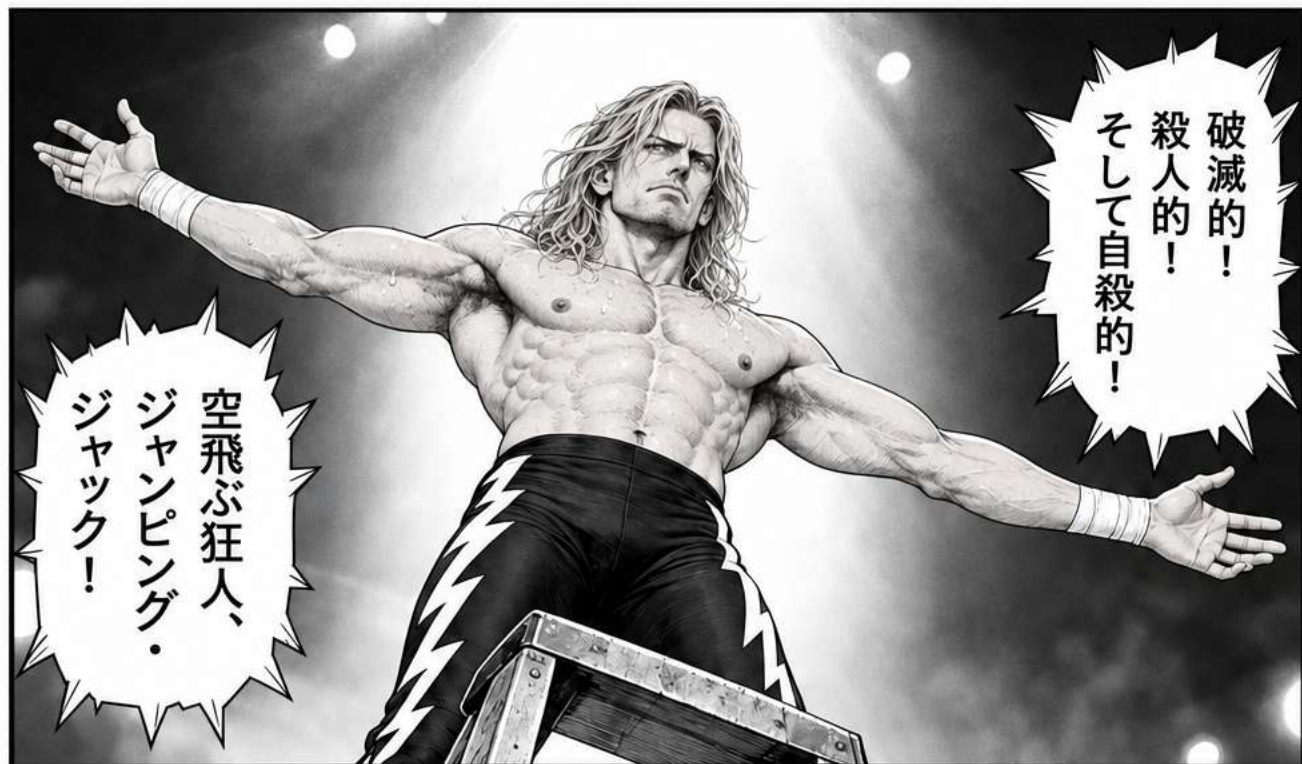
ジャンピング・ジャック

正確には、
一万五千人が
見守る――

GO
JACK!

THIS IS
WRESTLING!

高さ八メートルの、
脚立の上だ。



破滅的！
殺人的！
そして自殺的！

空飛ぶ狂人、
ジャンピング・
ジャック！



死ぬよりも、
ファンの記憶から
消えるほうが怖い。



いつものインタビュー

死ぬのは
怖くない？



はっ。
言わされてる
だけだ。

死ぬほうが怖いに、
決まってるじゃないか。



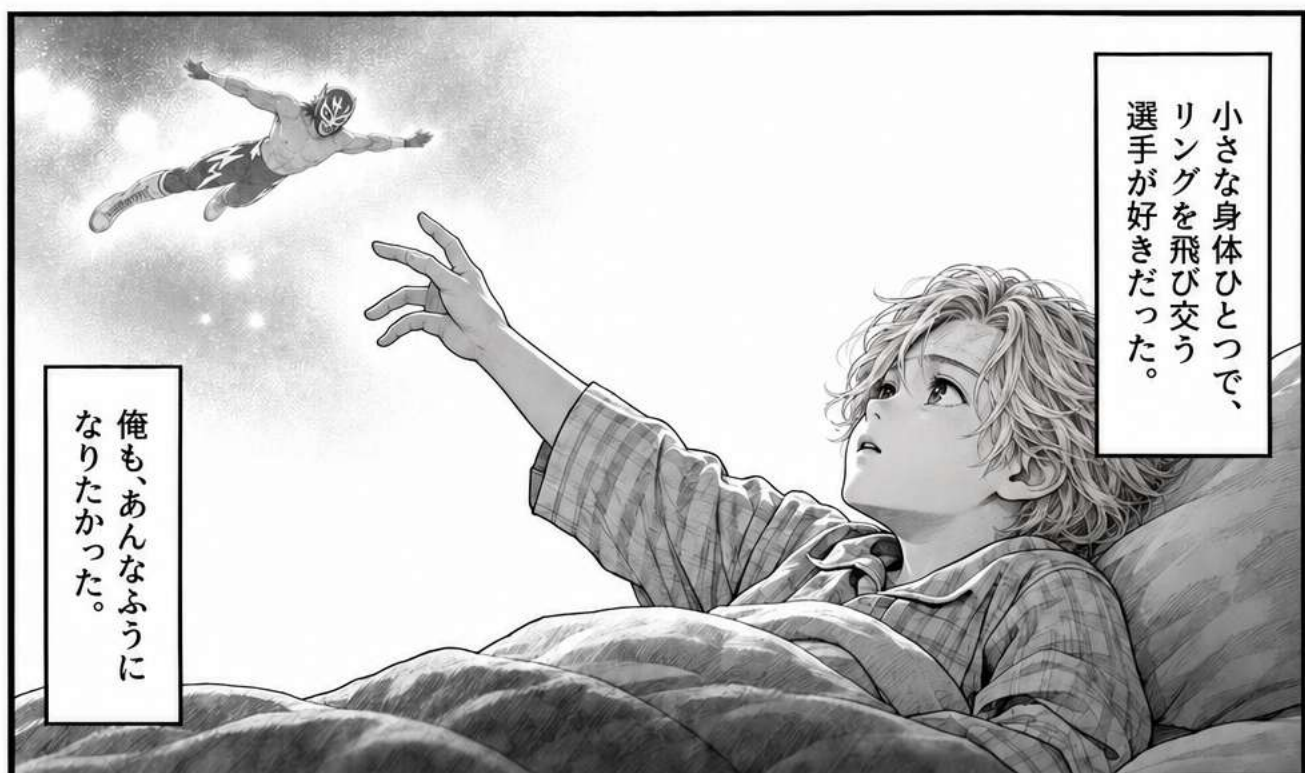
子供の頃の俺は、
ひ弱で病気がち
だった。



大男の殴り合い
よりも――



ベッドで熱に
うなされながら、
プロレスを
見ていた。



小さな身体ひとつで、
リングを飛び交う
選手が好きだった。

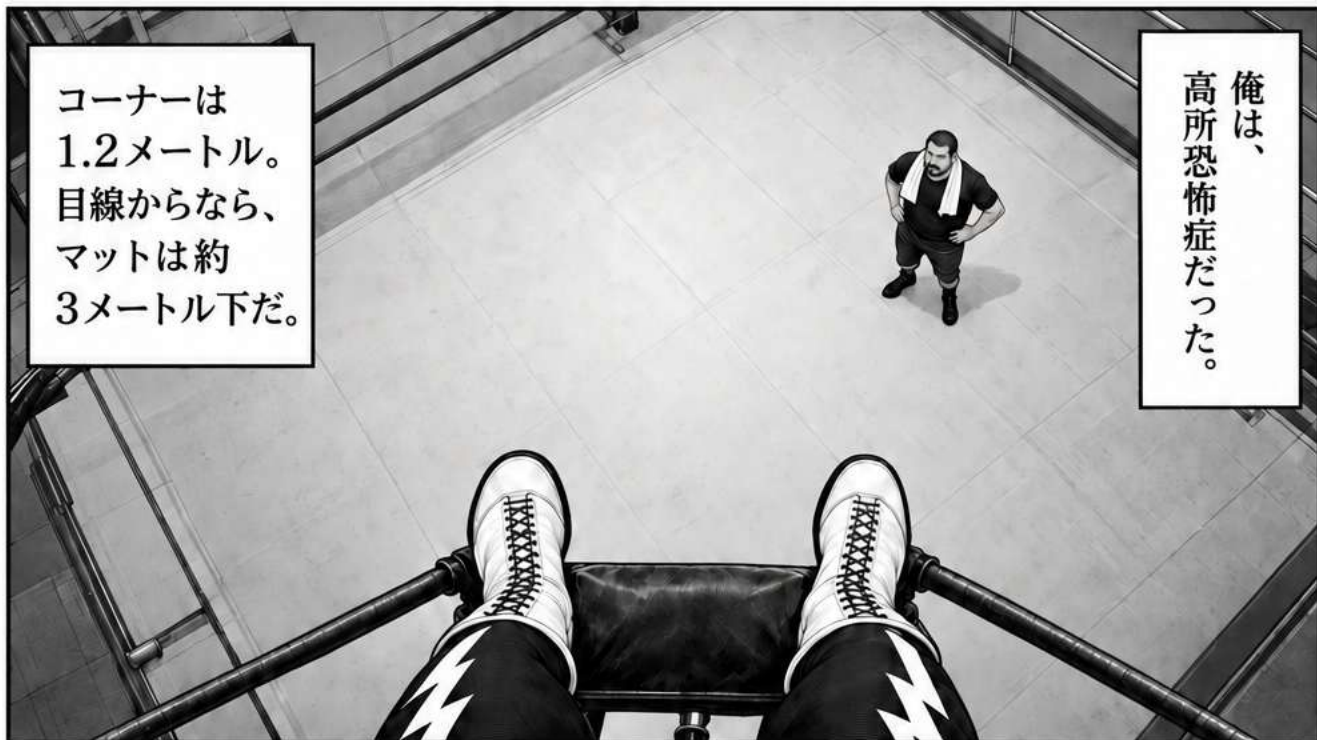
俺も、あんなふう
になりたかった。



そこで、
わかった。

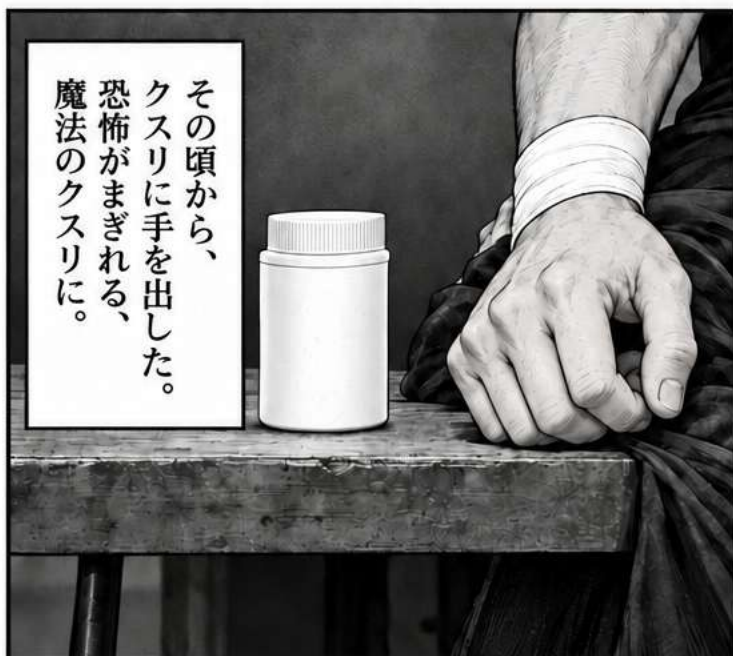


身体を鍛え、
道場に入った。
受け身と飛び技を、
徹底的に練習した。



コーナーは
1.2メートル。
目線からなら、
マットは約
3メートル下だ。

俺は、
高所恐怖症だった。



その頃から、
クスリに手を出した。
恐怖がまぎれる、
魔法のクスリに。



たかが三メートル？
足は、すくむもんだ。

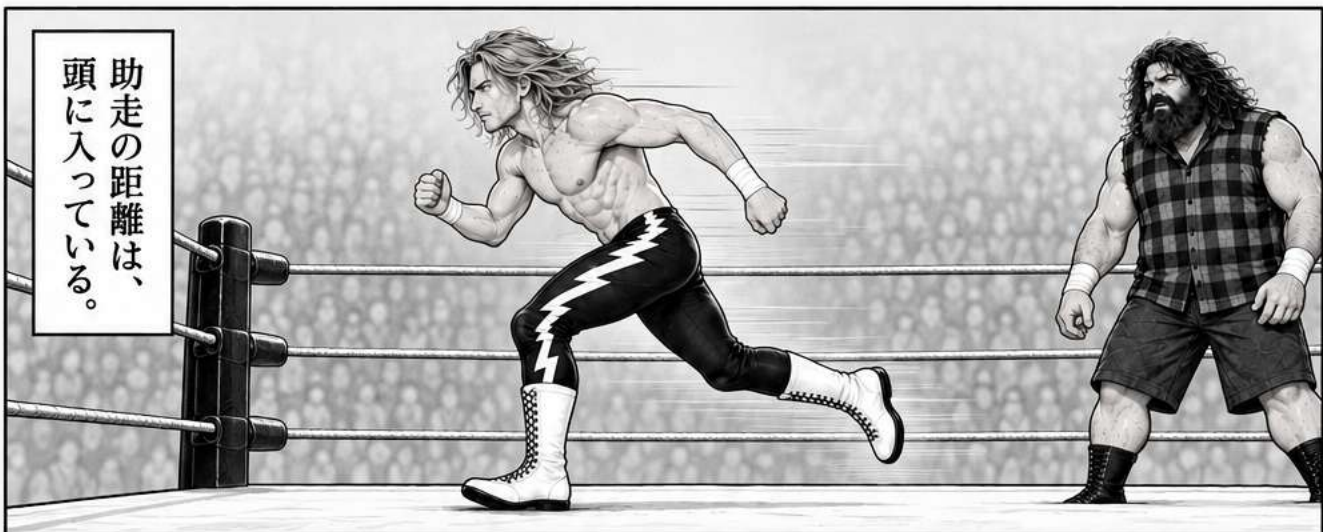


パワーで
勝てなくても、
戦える。



体重差は、
四十キロ。







そして、
背後へ跳ぶ。



スワンダイブ式の、
ムーンサルトプレス!



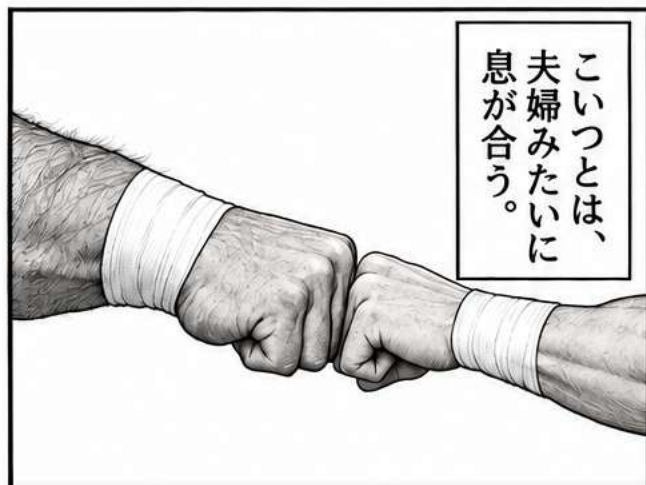
これくらい、
俺には朝飯前の
繋ぎだった。







本命は、
場外への
ウラカン・ラナ。



こいつとは、
夫婦みたいに
息が合う。



飛ぶ俺以上に、
受ける相手の
技術が要る。



互いの信頼が、
大技を支えている。



だが――



ジャックが、
場外の鉄柵へ！
痛い自爆です！



怪我なんて、
日常茶飯事だ。



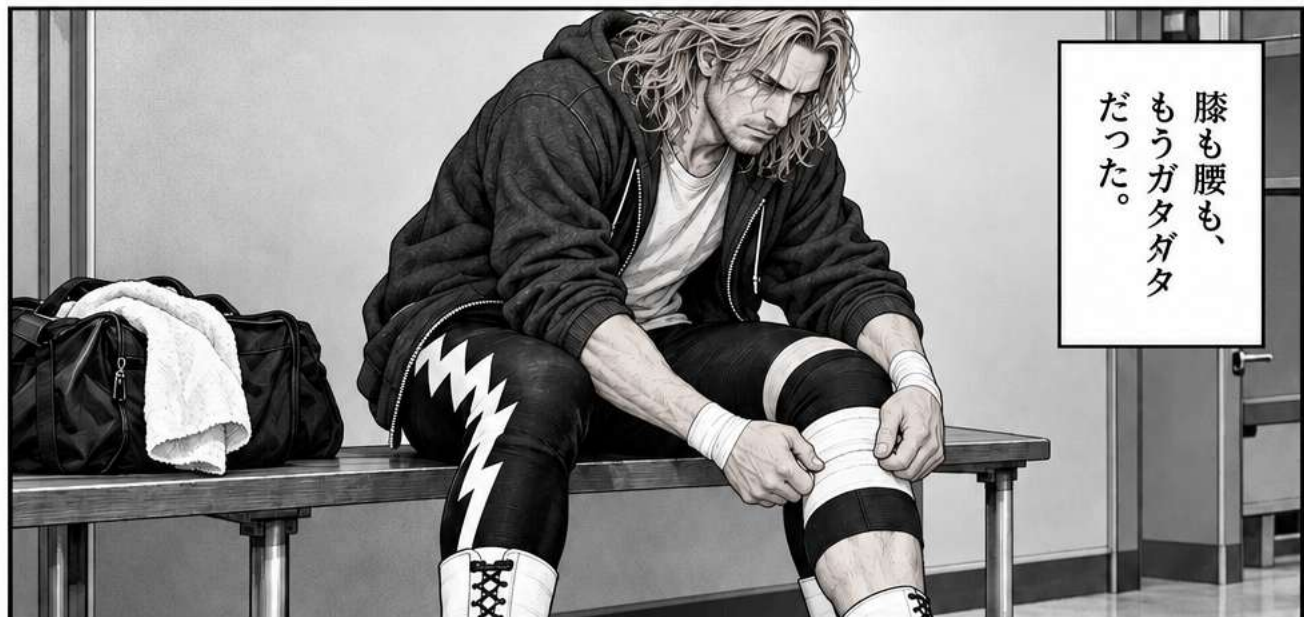
失敗だって、
ある。



内臓まで、
壊れかけた。



全身、あちこちを
骨折した。

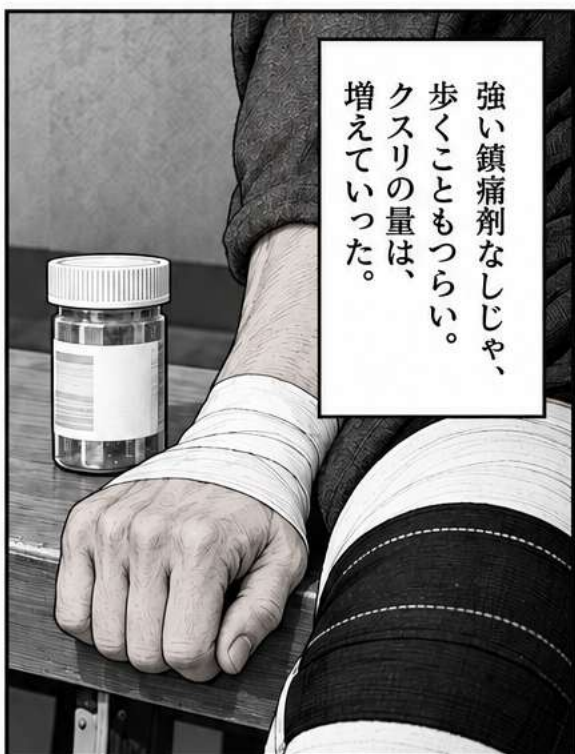


膝も腰も、
もうガタガタ
だった。

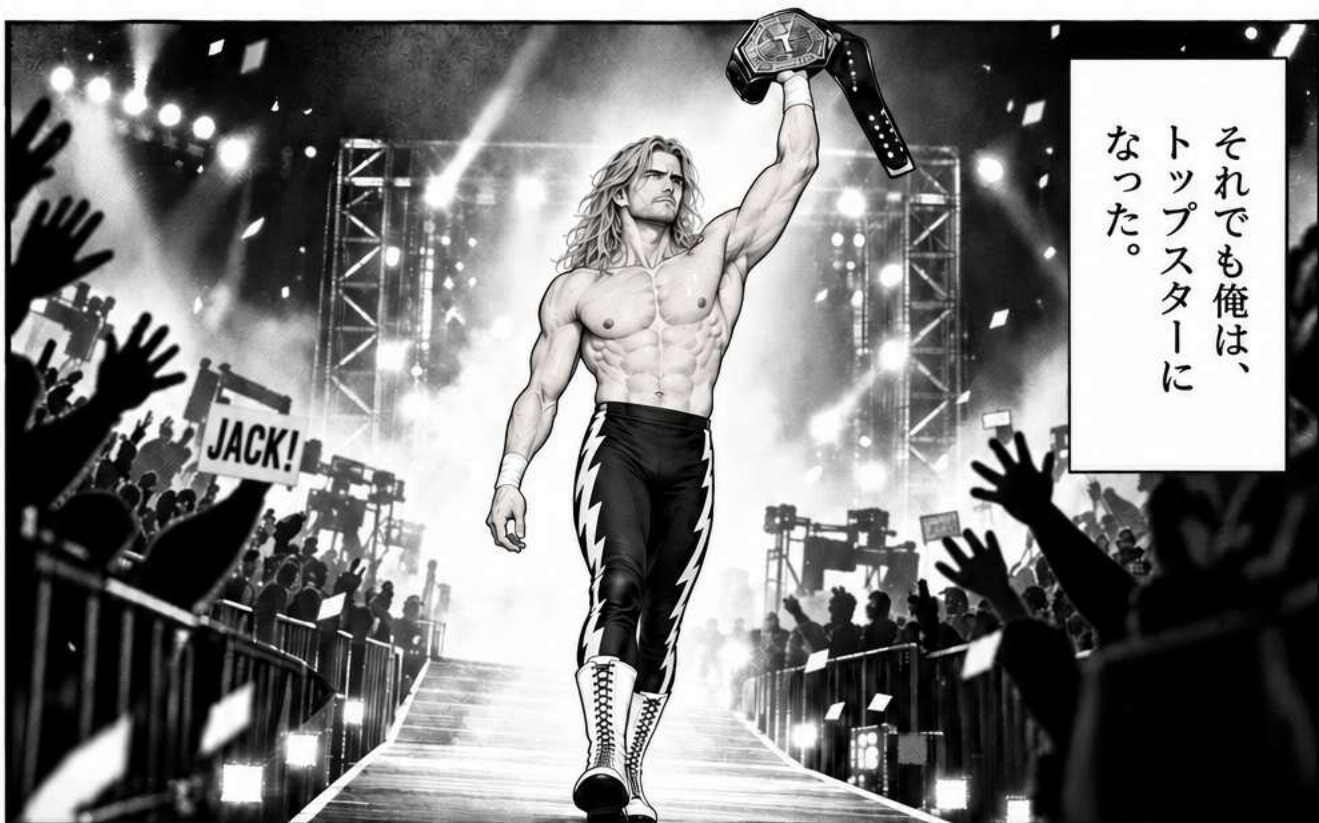


ドクターストップ？
俺には通用しないさ。

人気が出るほど、
試合が怖くなった。



強い鎮痛剤なしじゃ、
歩くこともつらい。
クスリの量は、
増えていった。



それでも俺は、
トップスターに
なった。



子供も、
できた。



結婚した。



みんな、
そう思ってただろうな。

順風満帆。
人生の絶頂。



良い
レスラーで。

良い夫で。

良いパパで、
いなくちゃ
ならない。



毎日が、
悪夢だった。



どれも
俺には
無い



追いかける連中は、
ネタに困らなかった
だろう。



酒とクスリに
逃げ、酷いことを
繰り返した。





女房も、
ついに愛想をつかした。



俺に、
残ったのは――



何も、
言えなかった。



落ちぶれレスラーという
不名誉と、
毎月の支払いだけだった。

CHILD SUPPORT



長年の酷使と、
クスリで、
身体はボロボロだ。



歳も取った。



昔のような、
ハードな試合は
できない。



まさに
崖っぷち。

いや。
とつくに、
崖から落ちていた。

それは、
寒い日だった。

いつものように、
道の端で
気を失っていた。



誰も、
俺に目を留めない。



そこへ、
あの娘が
通りかかった。



待って、ママ！
止めて！





母親は、
必死で止めよう
とした。



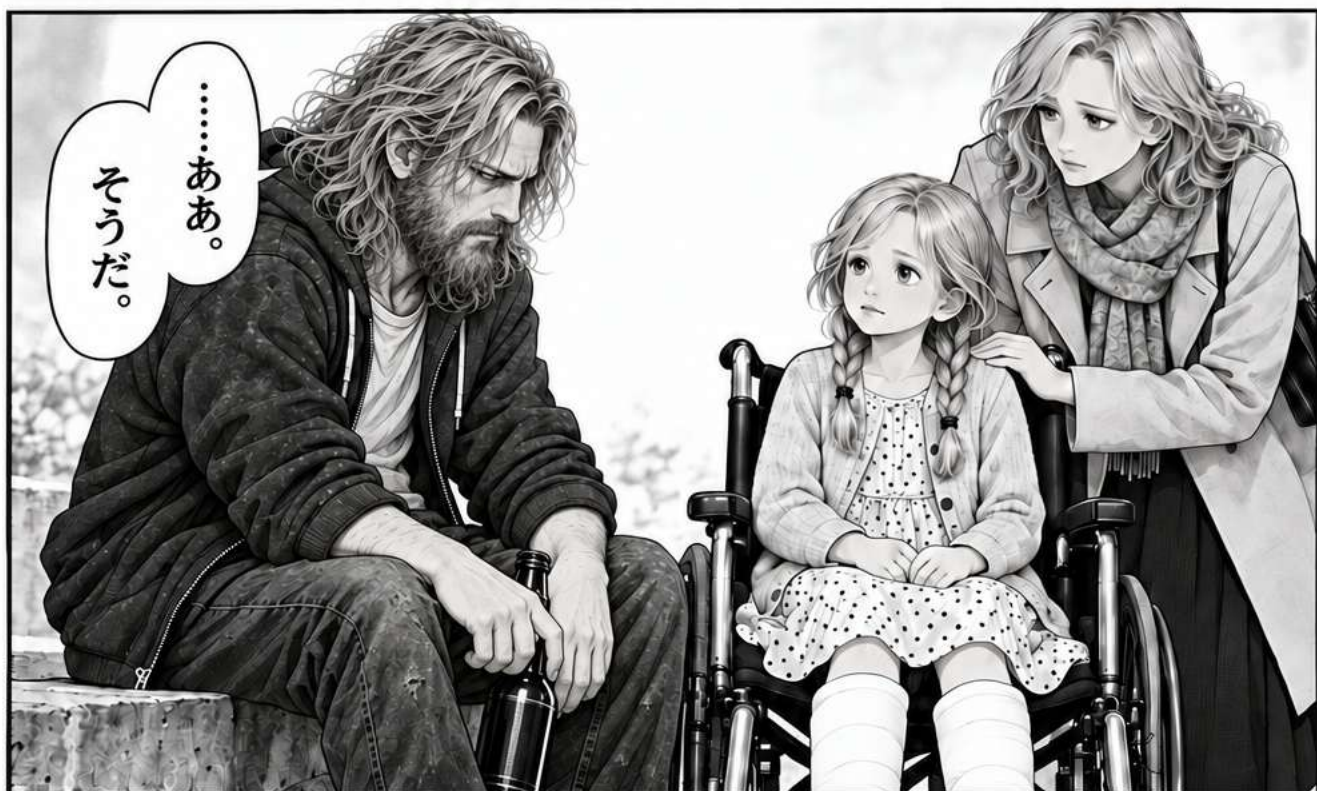
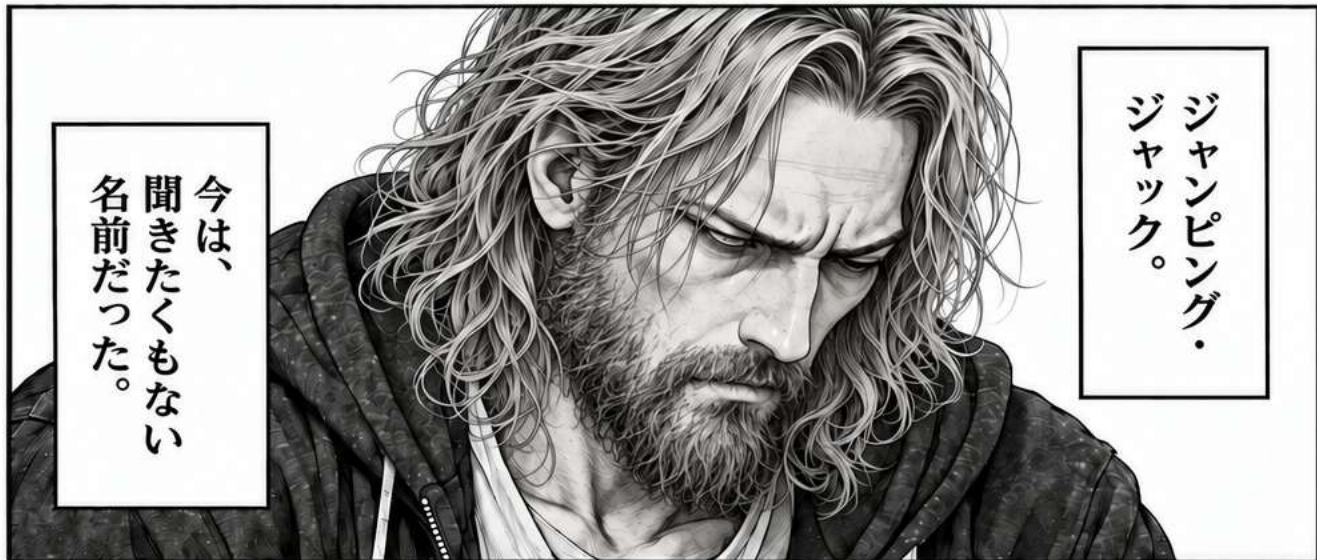
アニー、
だめよ……



それなのに、
あの娘は
立ち上がった。

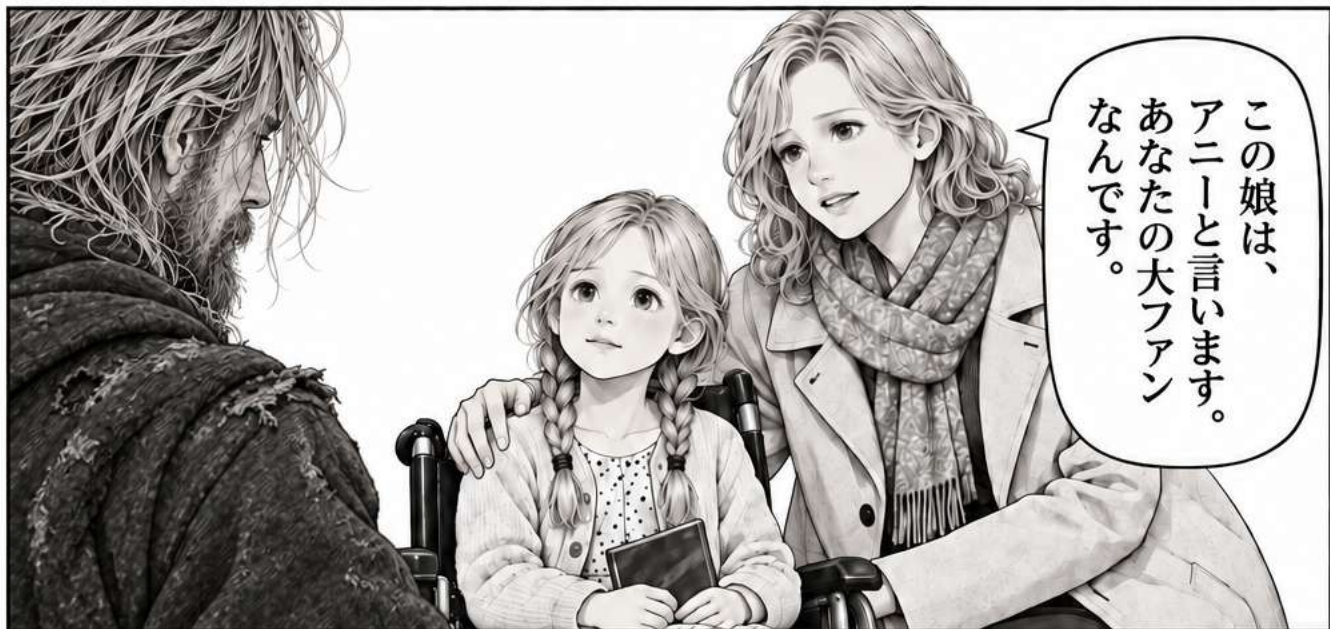


ねえ、あなた——
ジャンピング・
ジャックでしょう？













俺は、
泣いた。
泣きじゃくった。



会社へ
向かった。



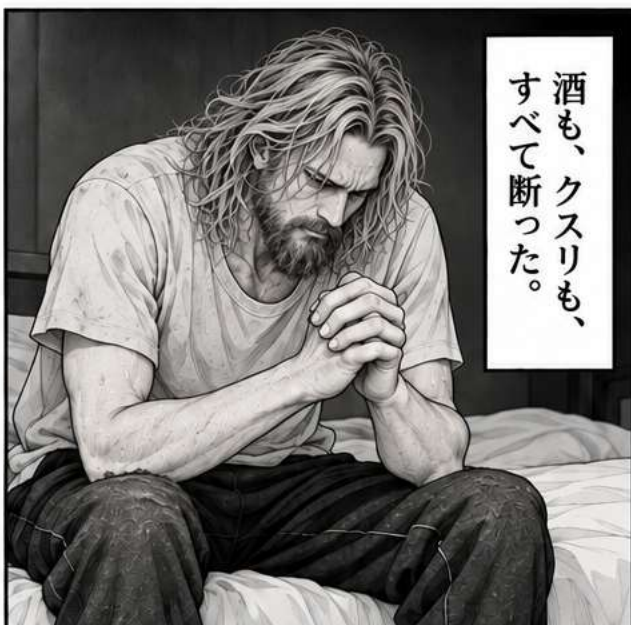
そして――



たった一人、
残ってくれた
ファンのために。



これまでの、
どんなことより
苦しかった。



酒も、クスリも、
すべて断った。



数ヶ月、
身体を鍛え直した。



それでも、
約束だけは
残っていた。



逃がたい夜も、
あった。

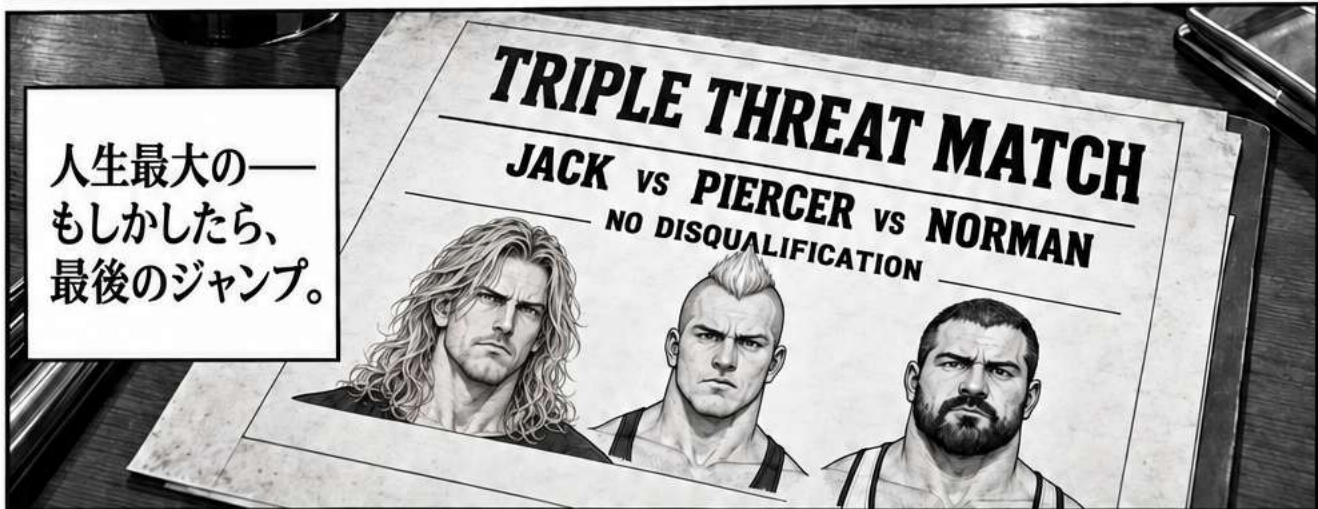
フレッドは、
年に一度の
大舞台を
くれた。



ジャック。
最後の
チャンスだ。



人生最大の——
もしかしたら、
最後のジャンプ。



怖くても、
行く。



そして、今。





さて、
話は追いついた。



死ぬかも
しれない。



ハメートル。
足が、すくむ。



俺は、
飛べるのか？



ふと、
客席に――。



おさげの、
車椅子の少女。

きっと、
アニーに違いない。



俺は、
そう確信した。



急に、恐怖がなくなった。
今すぐ、飛びたくなった。



見てろよ、
お前ら。



破滅的！
殺人的！
自殺的！

ジャンピング・
ジャックが、
帰ってきた！



津波のような
歓声。
星の爆発みたいな、
フラッシュ。

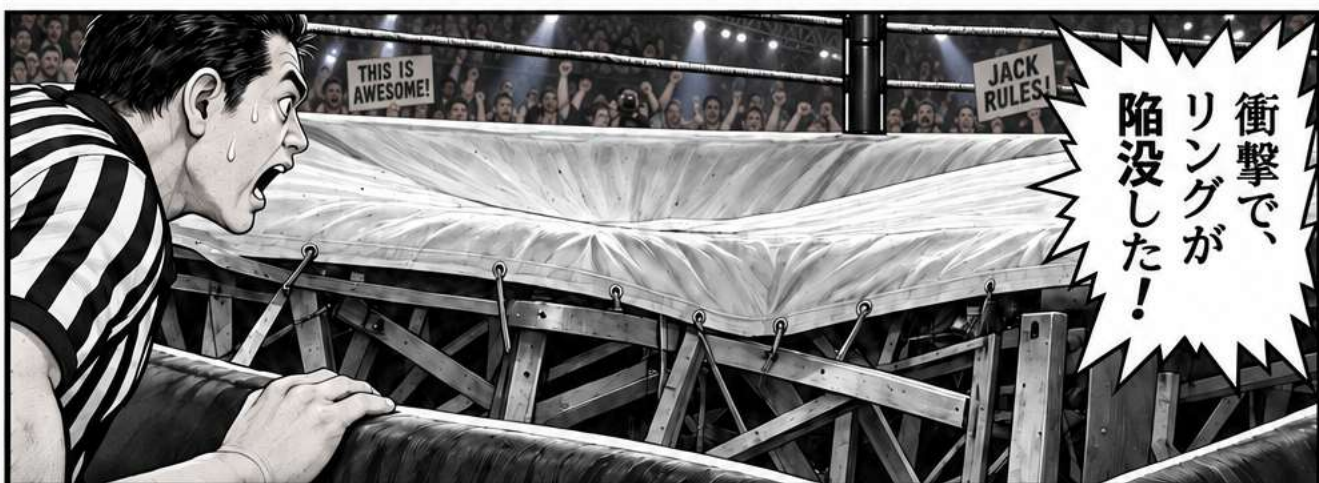
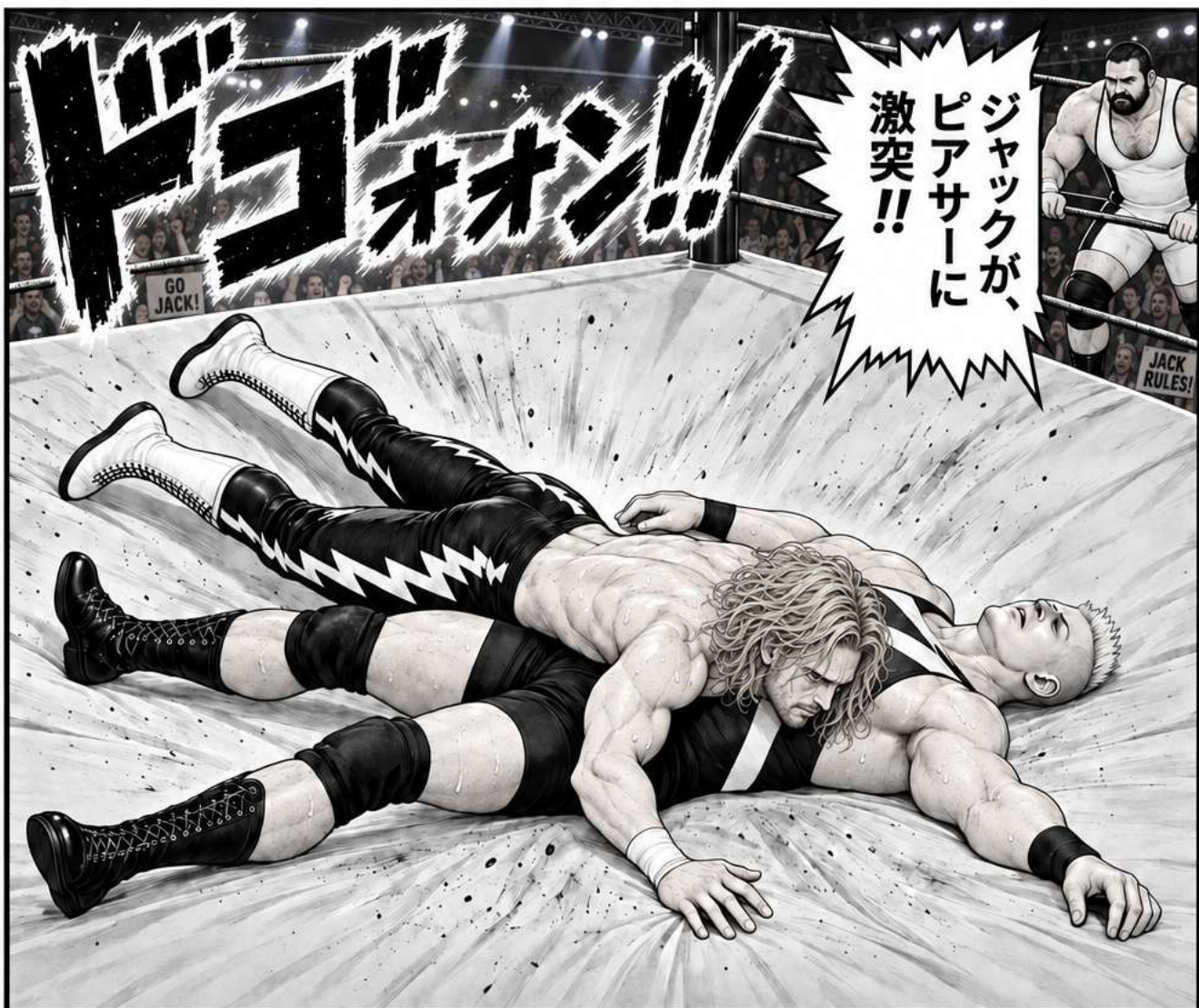


凄まじい
高さから、
ダイブを
敢行する!!



俺は、
やつとなれた。

ベッドで見た、
あの日の
スーパースターに。







担架で運ばれる
俺を、みんなが
拍手で送ってくれた。



もちろん、
あの女の子だって――



観客も、同僚も、
スタッフも。



そうに、
違うない。



明日の新聞には、
きつとこう載る。



今日の試合は、
永遠に語り継がれる。



俺が、
死んだあとも。

みんなの記憶に、
永久に残るんだ。



ステージを離れ、
扉が閉ざされた。



真っ暗に、
なった。



スポットライトは、
消えた。



ワア……

ウー……

歓声も、サイレンも、
ずっと遠くに聞こえた。



俺は、
ジャンピング・
ジャック。

死ぬよりも、
ファンの記憶から消えるほうが、
ずっと怖い。

完